
恋物語を実現させるために、悪女になろうと思う。

RI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋物語を実現させるために、悪女になろうと思う。

【Nコード】

N3332V

【作者名】

RI

【あらすじ】

悪女、それはヒロインに様々な試練を与えることで成長させ、そして読者にヒロインへの好感を抱かせる・・・まさに「神」だ。恋物語を読みまくって、そのことに気づいた私は「悪女」になろう

と決心した。そして、女を綺麗にするドレスの仕立て屋を家族の協力の元、こっそり営業し始めた。しかし、私「悪女」仕立て屋であることは絶対の秘密。これがばれたら私は悪女ではなくなってしまう！しかし、社交界で超有名な公爵はなぜか私の秘密を知っている・・・？

「貴女の秘密を広めたくないですよね・・・？」
「このっ卑怯者ー！！！」

悪女は神なのです。

「その服、あなたの肌には似合わないのではなくて？
紫や黒など濃い色のドレスでも着ればよろしいのに……。
それに、その空きすぎた胸元・下品に見えますわよ？
自分に似合うドレスを選べないなんて、淑女失格ですわね？」

私の目の前には、侮辱されて悔しそうに手を握りしめている可愛らしい少女。

ああ……。可愛い。

今回のターゲットは、ノートーラス伯爵令嬢レイナ様。
こげ茶色の髪に白い肌の、とても儂げな可愛らしい少女だ。
しかし、いつも服が彼女に似合っていない。

儂げな容姿なだけに、薄い色のドレスを着ると存在感がなくなってしまうし、白い肌が目立たない。
もっともっと彼女には似合うドレスがあるし、それを着ればもっと

可愛く見えるのに、くやっしい!!

・・・という心の中の声は隠して、何度も練習した「悪女の笑み」をレイナ様にご披露する。すると、レイナ様はビクリと怯えた。

ここは、美少女を悪女が虐める典型的な場所の裏庭だから、その様子を何人かの紳士も見ている。よしよし、計画通り。これでまた新たな恋物語が始まるはずだ。

ああ、申し遅れてごめんなさい。

私はフォーラス侯爵令嬢、ルティシア・アグネス・フォーラスです。そして、社交界じゃ有名な「悪女」というものをやっております。

え、なぜかって？それはもちろん、「恋」の手助けをするため。

私は「恋物語」を心底愛している。

数々の恋物語を読みあさり、そしてそれを研究し、私はある結論に至った。

悪女最高!!

恋物語では絶対悪女は嫌われる。

しかし、良く考えてほしい。

悪女はヒロインに様々な試練を与え、ヒロインを成長させるだけではなく、読者に「ヒロイン頑張れ」という感情まで起こさせる・・・もはや「神」だ。

別に私は「神」になりたいわけではないが、「恋」する可愛い乙女が大好きなので、その人のことを応援したいと思う。よって悪女になった。

それに家族は反対するかと思ったが、なぜか大賛成してくれた。「これで変な虫がつかなくなる」と喜ぶシスコンの兄と親ばかりを持つて私は嬉しい。

まあ、悪女をしていなくても私は異性に見向きもされないが。

自分で言うのも悲しいが、私はとても地味な顔をしている。

悪女メイクをしなければ、存在してるのか、してないのかわからな

いほど、とにかく地味だ。

まあ、そんな余談は置いておいて、今日の悪女の仕事はこれだけだし、もう家に帰ろう!!

辺りを見回すと、すぐに兄が見つかった。

兄は私に似ず、甘いマスクの美形だ。

もちろん、乙女達が放っておくわけがなく、兄のいる場所は乙女が群がる。

そんな群がる乙女の姿は可愛らしいし、そこでまた何か恋物語が始まりそうな予感がして微笑ましいが、私は兄と帰りたいのだから少し困る。

毎回、あの乙女の大軍をかき分け、兄の元へ向かうのは一苦勞なのだ。

よし、行くぞ!!

「ちょっと、どいてくださらない?」

わざと、群がっている乙女達に冷たい視線を送ると、乙女達はビクリとした。

怯える乙女達に「悪女の笑み」を向けると、怯えた少女たちの間を通り抜けて、さっさと兄の元へ向かう。

「やあ、僕のルティシア。もう時間かい？」

「（お兄様、いちいち「僕の」ってつけるのやめてください、鬱陶しいです。）ええ。ですが、お兄様はこちらのご令嬢方と、まだ一緒に過ごしたいのでは？それなら、私はお待ちしておりますわ。」

「いいや、ルティを待たせるなんてそんな罪深いことはできないよ。ご令嬢方、申し訳ありませんが、御暇させていただきましたよ？」

兄がそう言うと、乙女達は残念そうな顔をして、私を恨めしそうに睨んだ。

まあ、妹の分際で兄を乙女達から奪ったのだから仕方がないだろう。乙女達に嫌われるのは悲しいが、これが悪女。これもすべて乙女達

のためなのよ!!

仕立て屋も重要人物なんです。

「今日も大活躍だったみたいだねえ？」

家へ帰るために馬車へ乗りこんだ私に、ニヤニヤしながらそう聞いてくる兄を見て、私の疲れは倍増した。

はぁ・・・。

「うん？何で愛しい兄を見てため息つくんだい？ルティったら、いけない子だね？」

「お兄様万歳！！お兄様最高！！お兄様天才！！お兄様大好き！！」

急いで私がそう言うと、兄は嬉しそうに微笑んだ。だが、その笑

顔が黒い。

私の兄、つまり次期フォーラス侯爵、レイフィス・パトリス・フォーラスは、恋物語では王子役となりそうな人物・・・まあ、つまり美形・金持ち・優秀という完璧な男だ。

これで、腹黒でなければ、シスコンでなければ・・・心底私は兄のことを愛しただろう。物語に登場するヒーロー役として！！

しかし、若干？の欠陥があろうとも、私は兄のことを尊敬している。なぜなら、兄は私の夢の実現を手助けしてくれているからだ。

私の夢・・・それは一人でも多くの恋する乙女を幸せにさせてあげること。つまりは、恋物語を実現させたい、ということ。

その実現のためには、悪女が存在が不可欠なのはもちろん、美しい衣装も必要なのだ！！（と私の研究から明らかになった。）

どんな美女も似合わない服を着れば、その魅力は半減どころか四分の一になる。

・・・という事で、私は悪女だけではなく、仕立て屋を営むことにした。

しかし、實際侯爵令嬢である私が営業などできるはずがない。

しかも、社交界では有名な悪女の私が、乙女の魅力を引き出す仕立て屋の仕事ができるはずがない。

これは困った、ということになった。

そこで協力してくれたのが、家族。

一店舗という制限つきだが、私がデザインした服を私が売ることができるように手を回してくれたのだ。

服を売る時は、仮面をつけている。

最初は、仮面をつけた女の仕立て屋など、不気味で誰も利用しないだろうと思っていたが、私のドレスが流行し、今では誰もが知る有名店！！フフフフッハ ハハハハハ！！！！

ああ、いけない……。ついつい口元が下がってしまった。チ

ラリと兄の方へ視線を向けると、なぜか微笑ましそうに私を見ていて、ギョツとする。

え、どこかに微笑ましいような部分あった？ないよね？

何だか気まづくなつたから、それを誤魔化すために、前から気になつていたことを兄に尋ねよう。

「そういえば、お兄様！！紳士方の方はどうなんですか？」

「うん、そうだな・・・たぶん、オーウェル伯爵がレイナ嬢を気にしてるのは間違いないね。

あの二人は幼馴染らしいし。

だが、二人の家は今、仲が悪いからお互いに近づけず・・・といったところかな？

狸子爵がレイナ嬢を愛人にしようとしているという噂もあるから、気をつけた方がいいよ？」

「まあ・・・素敵！！この恋は絶対に成就させなきゃ！！でも、狸・・・邪魔ね。」

狸子爵、ことグランウエル子爵は最近力を持ち始めた貴族だ。
裏では成金と悪口を言われている。
それに比べレイナ嬢の家は財政難。そこに付け込んで狸は愛する恋
人の中を裂くつもりらしい……。
なんて許せないの!!!

やはり、あの作戦で行くしかないわ!!
フフフと暗い笑みを浮かべた私を、兄は残念そうな顔で見つめる。

無駄よ!!
お兄様のその「悲しげな美少年の苦笑」攻撃には負けないわ!!
だって兄弟ですもの!!

「僕の愛しい可愛いルティ、まさかあのくそ狸を誘惑しようだなんて考えてないよね?」

私への攻撃に失敗した兄は、降参して嫌そうな顔をしながらそう言った。

さすが、兄だけあって私の行動をよく理解している。

「ウフフフフ……。」

「……アハハハ、全力で邪魔するからね？」

兄の必殺「天使の笑顔」攻撃が来たが、私は負けない、乙女達のために……。

仕立て屋はじつやってお仕事するのです。

「いらっしやいませー!」

フッフ、やっと来たわね!!
レイナ様を応援した(いじめた)舞踏会から、5日後にやってきた
お客様を見て、私の胸は期待で躍った。

「ご婦人のドレスを、頼みたいのだが……。」

あまりこういうところに来ないのか、お客様、オーウエル伯爵は
居心地悪そうにそう言った。
まあ、オーウエル伯爵ほどのお金持ちなら、専属の仕立て屋を雇っ
ているでしょうし、それは仕方がない。

「そのご婦人というのは、どのような方でいらっしゃいますか？」

悪女仕様ではない、いつもの声でそう尋ねると、伯爵は少しほっとしたようだ。

まあ、普通は誰でも仮面をつけた女は怪しむものだ。

だが、優しく、しかも若い女の声で話しかけられれば大抵は皆、警戒を解いてくれる。

悪女の時は、わざと耳に残るようなアルトで厳しめに話しているんだけど。

「私の幼馴染で・・・髪と目はこげ茶色、肌は白くてとても華奢だ。その・・・サイズは分からないのだが、一応プレゼントとして贈りたい。」

「わかりました。ご本人には秘密に、さり気無くプレゼントですね？」

言いにくそうにしていたオーウェル伯爵にそう言うと、わかって

もらえてほっとした、というように微笑んだ。

うーん、好青年！！この人なら、レイナ様と幸せになれそうだという確信がある！！

なんてったって、私はありとあらゆる恋物語を読破し、研究したのだから！！

「金はどれだけでも払うよ。できるだろうか？」

「はい、もちろん。これなんていかがですか？」

私が伯爵に見せたのは、薄紫のとても上品なドレス。

レイナ様は肌が白いから、紫ならその白さも目立つし、何より大人っぽい。

最近着ているドレスを見れば、レイナ様が大人っぽくなりたいと願っているのは明らか。

しかし、胸元を開ければ大人っぽく見えるというわけでもない。私がレイナ様に用意したドレスは、首元まであるが体のラインがしつかりわかるドレスで、でも品を失わないように刺繍や、レースなど細部にまで凝ってある。

「うん、これならレイナに似合いそうだ。とても気に入ったよ。でもサイズは大丈夫だろうか？」

「はい、レイナ様というのはノートーラス伯爵令嬢レイナ様のことです。でいらっしやいますよね？私もあったことがございますので、サイズはこれで大丈夫ですわ。」

ドレスを作るようになって5年・・・見れば、大体のサイズはわかるし、これは私がレイナ様のためにデザインしたものだから間違いない。

あまりにも私が自信満々にそう言ったからか、伯爵は不思議そうにしながらも頷いてくれた。

ドレスを箱に入れて、プレゼント用に包装しながら、私はうっとりとする。

ああ、これを着たレイナ様。そして自分のプレゼントを着たレイナ様を見つめる伯爵……。

なんて恋って素晴らしい!!

「それでは、次の舞踏会の一週間前に、ドレス一式をこちらの店名で贈らせていただくのでよろしいですか？」

「ああ、よろしく頼む。」

カランカラン

そんなドアのベルの音とともに出て行った伯爵を見送ると、私は一息ついて仮面とカツラを外した。

私の髪は銀色に近い白金で、少々目立つのだ。

正体を隠すためには、髪色を変える必要があるとわかってはいるけど、蒸れるし、頭が重いし……。

でも、これは仕事。それも恋する乙女を手助けするという、大事な使命があるのだ！！私は負けない！！頭が蒸れることにも、頭が重いことにも！！！！

悪女は父と兄とも戦います。

「ルテイ、お願いだ・・・お願いだから止めて！！父様泣いてしま
うよ？いいの？」

「お父様はそんな事で泣くような弱い方ではありませんわ。お父様
は！！私の夢の邪魔を！！するつもりですか！！？」

「ううっ・・・でもダメだ！！こんな可愛い娘を奴にはやれんー！
」

私のことを抱きしめながら、シクシクと泣き真似をする父の手を
ペシリと叩くと、私はため息をついた。
父だけでなく兄も、私が狸子爵に接触することを嫌がっているのだ。
この前の舞踏会から毎日、考えなおせといわれ続けられたため息も出
る。

私が「悪女」になることには大賛成したのに、どうして子爵に接触することはダメなのかしら・・・？

これも、大事な悪女の仕事のうちの一つなのに・・・。

「ルテイ、今君は危険なことをしようとしているのだよ？奴に万が一気に入られたら・・・兄様は・・・兄様は・・・。」

そう言ったあと、フフフと黒いオーラで笑いだした兄を見たら、何人の恋する乙女がなくなるだろうか？せつかく兄は天使みたいな可愛い顔をしているのに、本当に残念・・・。

「さつきから、奴、奴って・・・それはいったい誰のことですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

私がそう聞くと、兄も父も黙り込む。
もう・・・何なのかしら？

「はぁ・・・わかりました。狸子爵を誘惑するのはやめます。」

説得して、レイナ様に接触しないようにさせます。と心の中で咳くが、それは二人には聞こえないので、兄も父も大喜びした。
兄と父には少し罪悪感がわくけれど、これもふたりのためなのです。

有能なのに娘だけにデレデレの父、乙女に囲まれながらも妹を優先するシスコンの兄・・・。
残念！！残念すぎる！！

妹（娘）離れさせることは、二人のためにも・・・そして全国の

夢見る乙女達のためにも必要なのだ。

ガタン、と馬車が揺れ、従者が到着したことを知らせてくれる。

さあ、計画実行よ!!!

悪女は父と兄とも戦います。(後書き)

少々短いですが、区切りがいいのでここで切らせてもらいます。
お待たせしました!!!次こそ公爵登場です!!!

王子・・・あなた誰ですか？

「ルテイ、約束は絶対に守るんだよ？いいね？」

「はい、もちろんですわ。」

何度も念押しする兄と父から離れて、私は辺りを見回した。

兄と父は、あれでも由緒正しい名家の侯爵と次期公爵。

色々といさつまわりがあるから、そんなに私のことは気にしてられないはず。

その隙を見て、子爵を誘惑、ではなく説得しなければ・・・。

しかし、肝心の子爵が見当たらない。それにレイナ様もまだ来ていないようだ。オーウェル伯爵はもう来てるみたいだけど・・・。

不自然にならないように、子爵を探していると、ヘラヘラした頭の軽そうな男がどどんやってきました。

「これはこれはルティシア姫・・・今日の貴方はいつにもましてお美しい！！まるで氷の女王のようだ！！」

「いや、貴女は女王の美しさだけではなく可愛らしさも秘めている・・・そう、氷の女神のようだ！！」

ちよつと待ちなさい。

それ、褒め言葉になってないから・・・。たぶん私の薄い水色の瞳にかけてるんだらうけど。

氷って・・・私が冷たくて残虐で恐ろしいって言ってるのと同じよ？何、それ嫌味なの？

というか、氷の女神って何？初めて聞いた単語なんですけど・・・。

無反応な私を気にせずに、つらつらと褒め（？）言葉を並べていく男たちを見て、口元を引きつらせなかった私を誰か褒めてほしい。

「私の氷の女神・・・どうか私とダンスを。」

「いや、ぜひ私にあなたと踊る幸運を。」

「フォーラス侯爵令嬢、ぜひ私と!!」

「まあ、氷ように冷たい私と踊っては、貴方の手が凍えてしまいませんわよ？オホホ・・・失礼しますわ。」

多くの男を侍らすのも、「悪女」の仕事なのだが、今日はそれより大事な任務がある。

ニコリと笑って、「フォーラス侯爵令嬢」に群がっていた男の大軍を抜けると、やっと目的の人物が目に入った。

いた!!

いつもより1・3割増しの趣味の悪いギリギリした衣装を身にまとった子爵はゲラゲラと下品に笑っている。その隣にいる、子爵の実の娘アンジェリナ様を見て私は思わず眉間にしわを寄せてしまった。

ああ・・・一気に今日の仕事の難易度が上がったわ・・・。

アンジェリナ様は、典型的な「根性の悪い女」。

え、何が「悪女」と違うのかですって？全然違うわよ!!!

「悪女」は常に高貴でなくはいけない。

弱みを一切外に出さず、表面的には完璧でなくはいけないのだ。

アンジェリナ様は、少しは主人公に貢献はしているだろうが・・・
なんというか、雑魚キャラなのだ。

それでは、主人公に困難を与えられない。そしてその困難は、解決

が難しくなくてはいけない。

それに、アンジェリナ様は自分以外は全部敵扱い。
主人公はもちろん、私にまで敵意を向けてくる。
つまり、私の計画の邪魔までしてくるのだ。

はぁ……。とため息をついたところで、急に周りがザワザワし
始め、今まで近くにいた乙女達がいなくなっていた。

あれ・・・？

視線を中央に向けると同時に、私は目を見開いた。

王子！！

太陽の光のようにキラキラ輝く金髪、それに宝石みたいなエメラ
ルドの瞳。

全てが計算されたみたいに、絶妙に配置されている完璧な美形!!!
物語では王道の王子役にピッタリだ!!!

あれほどの美形なら、多くの乙女が恋い焦がれているだろう・・・
。またそこで新たな恋物語が始まるに違いない。

ああ・・・悪女の腕が鳴るわっ!!!
その時はどうぞ、よろしく。と心の中でお辞儀すると、ふと疑問が
浮かんだ。

あの人、誰・・・？

悪女には取り巻きもいます。

・・・なんてことなのっ！！！！

あんな美味しい王子キャラをこの私が知らないなんてっ・・・。

私・・・悪女失格よ。

うっ・・・なんて情けないのっ！！

自己嫌悪に陥って、うっすらと涙が浮かぶ。

だいたい、私のこの地味顔も悪いのよね・・・。

髪なんて薄い金色で、はっきり言って存在感がない。

それに瞳の色も薄い水色・・・何もかも私の持つ色彩は薄い。

もっと悪女に相応しい派手な容姿をしていたなら・・・。

一度始まると止まらない自己嫌悪。

「悪女」は自分の感情を一切見せず、完璧でなければいけないのに・・・今の私は誰から見ても落ち込んでいるとわかるほど落ち込んでいた。

「ルティシイ？大丈夫？」

はっとして横を見ると、戦友のナタリアがいた。

「ナタリー！！ええ、ちよっといつもの自己嫌悪が……。ごめん
なさい。」

私がそう言っつて潤んだ目をパチパチして、涙をこぼさないように
するとナタリーはクスクスと笑った。

彼女はブラウン子爵令嬢、ナタリア・マリー・ブラウン。
私の支持者であり、「悪女の取り巻き」をやっている。

そう、完璧に「悪女」になるには私一人の力では足りないのだ。
「悪女」には多くの取り巻きの必要となる。

そこで私は、社交界でつまらなさそうにしていたナタリーに目を付
けたのだ。

ナタリーに私の研究結果を見せると、彼女は感激して仲間にしてほ
しいと言ってくれたの。

どうやら、彼女は「恋物語」に憧れていたのに、現実の社交界は本
当につまらなくてうんざりしていたらしい。

今や、私の取り巻きであり、私の研究の支持者は10人を超える。もちろん、取り巻き役をしてきている皆には今日の計画は報告済みだ。

しかし、子爵を目の前にして落ち込みだし、計画を実行しない私を見て皆は心配してくれたのだろう。

その代表としてナタリーが様子を見に来てくれたのだ。

周りを見渡せば、いる場所は別々だが取り巻きのみんなは心配そうに私を見つめている。

「ルティシイ、本当に大丈夫？ 貴女を自己嫌悪に陥らせた原因って何なの？」

「大丈夫よ、心配掛けてごめんなさい。ナタリーはあの方をご存じ？ 私・・・あんな王道の王子みたいな人を知らなくて・・・ああ、不甲斐無いわ！！」

「あ、ああ・・・えっと、そうね。彼はレイフィス・ルイ・グラフトン。次期グラフトン公爵で今はグラフトン伯爵を名乗ってるわ。あの、ルティシイがあの方を知らないのは仕方がないわ。一回も貴方とロード・グラフトンは会っていないし・・・気にしない方がいいわ。故意に貴女のご家族がルティシイとロード・グラフトンとの接触を絶っていたのですもの。」

ナタリーが憐みの目を私に向けてきて、私は目を見開いた。

・・・なんであの妹（娘）馬鹿はこんなことばかりするのかしら？
グラフトン伯爵と私の接触を絶つても何もいいことなんかないのに・・・。

はぁ・・・。とため息をつく、私は気を入れなおすために扇をパツと開いた。

あの兄と父に妨害されていたのだから、あの王子を知らなかったことは忘れましょう！！

私には今日、なすべきことがあるのだから！！！！
上がった口元を扇で隠し、視線を狸へと定める。

さぁ、もう逃がさないわよ！！！！

狸退治法 その1

私が一步前へ進むと、グランウェル子爵（狸）の視線がこちらへ向いた。

それにお得意の笑顔で返すと、グランウェル子爵はニタリとした。

「これはこれは、我が国の生きる妖精ルティシア様ではありませんか。今日はいつもに増してお美しい……。」

「まあ、お上手ですこと。グランウェル子爵、貴方の華々しい御噂は耳にしていますわ。」

「……いくら子爵といえども、妖精は気ままなのです。簡単には懐きませんわ。」

そう言って、挑戦的な目を向けると、子爵は目をぎらつかせて私の手を取った。

その瞬間、会場のいたるところから射すような視線がささる。

まあ……誰のものかは言うまでもない。

まあ、でもこのくらいなら「子爵を誘惑した」ことにはならないだろうから、最も鋭い視線を送ってきている父や兄は邪魔まではしないだろう。

でも、少しでも私から子爵に近づいてベタベタしたりしようものなら、すぐに邪魔しにくるという確信が私にはある。

「誘惑」と「説得」のラインを間違えないように、どれだけスムーズに子爵を打倒するか……ふふふ、腕が鳴るわ!!!

「これは手厳しい。それでは高貴なる妖精はどうすれば私に近づいてくださるのかな？」

かかった!!!

心の中で私は会心の笑みを浮かべる。

どうやら子爵は私と「ゲーム」を楽しんでいるつもりのようなが、これはゲームではなく「狩り」だ。

「ふふふ、熱心な人。人は皆、妖精を捕まえようと宝石やドレスや

珍しいものを餌にしますのよ。
でも、妖精はそんなものでは靡きませんわ。妖精は『もの』には執着しないのです。」

「ふむ・・・それでは、いったい何に妖精は執着するのですかな？」

思っていたより焦らされて、焦る子爵に「悪女の笑み」をご披露すると、周りに人には聞こえない声でそつと囁いた。

「貴女だけにお教えしましょう？妖精は『秘密』を捧げることが望むのです。」

「それならば、私は妖精を射止めることができそうです。私にはとっておきの秘密があるのですから。」

「あら、本当ですか？妖精は嘘は嫌いですわ。」

私はそう言うと、冷たい視線を子爵におくる。これも作戦のうちの一つなのだが、子爵は急に冷たくなった私を見て余計に焦り出した。

これで、きっと「あの証拠」が得られるに違いない。

狸子爵の打倒を考え出した時から、私はある情報を握っていた。それは最近貴族を狙う賊の援助を子爵がしているということ。賊を匿い、その賊が盗んだ財宝を闇取引で高額な値段で売りさばっていたらしい。

しかし、族の姿を見た者はおらず、闇取引の証拠もあげられない。このことを知っているものはこの場にも何人かはいらるだろう。しかし、私はもう一つ重要な情報を手に入れていた。

「嘘ではありません、貴方はきつと気に入るでしょう。とても青い

伝説の宝石のありかを私は知っています。」

狸退治法 その1（後書き）

ツッコミどころ満載だと思っておりますが、御容赦ください。
久々の更新です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3332v/>

恋物語を実現させるために、悪女になろうと思う。

2011年9月30日07時52分発行